
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 頁《ページ》

| ：ルビの付いていない漢字とルビの付く漢字の境の記号
(例) 何力月 | 経《た》ったか

「猫」の下巻を活字に植えて見たら頁《ページ》が足りないから、もう少し書き足してくれと云う。書肆《しょし》は「猫」を以《もつ》て伸縮自在と心得て居るらしい。いくら猫でも一旦《いったん》甕《かめ》へ落ちて往生した以上は、そう安っぽく復活が出来る訳のものではない。頁が足らんからと云うて、おいそれと甕《かめ》から這《は》い上る様では猫の沽券《こけん》にも関わる事だから是丈《これだけ》は御免蒙《ごめんこうむ》ることに致した。

「猫」の甕へ落ちる時分は、漱石先生は、巻中の主人公苦沙弥先生と同じく教師であった。甕へ落ちてから何力月 | 経《た》ったか大往生を遂げた猫は固《もと》より知る筈《はず》がない。然し此序をかく今日の漱石先生は既に教師ではなくなった。主人苦沙弥先生も今頃は休職か、免職になったかも知れぬ。世の中は猫の目玉の様にぐるぐる廻転している。僅《わず》か数力月のうちに往生するのも出来る。月給を棒に振るものも出来る。暮も過ぎ正月も過ぎ、花も散って、また若葉の時節となった。是《これ》からどの位廻転するかわからない、只《ただ》長《とこし》えに変らぬものは甕の中の猫の中の眼玉の中の瞳《ひとみ》だけである。

明治四十年五月

底本：「筑摩全集類聚版 夏目漱石全集 10」筑摩書房
1972（昭和47）年1月10日第1刷発行

入力：Nana ohbe

校正：米田進

2002年4月27日作成

2003年5月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。